

[研究論文]

クリティカル・ソーシャルワークにおける「クリティカル」概念の整理の試み —ソーシャルワーク教育に必要なクリティカル・シンキングの概念確立のために—

隅 広 静 子

はじめに

最近、クリティカルという言葉が筆者の目や耳に留まることが多くなった。例えば、教育方法としてクリティカル・シンキングが重視されたり、また新たなソーシャルワーク理論として、クリティカル・ソーシャルワークの紹介が散見される等である（松岡2003；北川他2007；横田2007；舟木2007）。

クリティカル・シンキングとは、イギリスや北米を中心に心理学、哲学、教育学等の分野で発展し、現在は高校や大学教育において必修科目としている大学も少なくないと言われる。わが国でも90年代以後注目されるようになり、それを大学教育へ導入する必要性が議論されている（岩崎2002；Paul, et al.=2003；Fisher=2005；鈴木他2008）。また、急速に変化する社会・経済状況への迅速な対応に求められる思考方法として、経済界においてもその重要性が指摘されている（寺田2001；グロービス・マネジメント・インスティテュート2005）。

このように、クリティカル・シンキングに対する近年の関心の広がりによりその定義は一様ではないが、一般的には例えば「与えられた情報や知識を鵜呑みにせず、複数の視点から注意深く論理的に分析する能力や態度」（鈴木他2008：8）と説明されている。従ってそれは、「時に前提条件や先入観をも全面的に見直す必要がでてくる。権威ある個人や団体が示した『一般的に認められた知恵』であっても、吟味する」（鈴木他2008：i）のである。

クリティカルという言葉は一般的に、「批判的・危機的」等の日本語訳がされている。しかしクリティカル・シンキングを、例えば「批判的思考」等と訳すのは短絡的であり、上記の鈴木によればそれはむしろ、「創造的思考」とでも考えるべきものであると言う。というのも、それは上記のように、与えられた情報等を鵜呑みにするのではなく、その前提や証拠資料等を吟味・検討することで、「新たな可能性を開き、不可能と思えることでも解決の方向性を見つけ出そうとする建設的なもの」（鈴木他2008：ii）だからである。

実は筆者はここ数年、実習を含めソーシャルワーク教育に携わる中で、従来の知や価値観等

受付日 2009.11.2

受理日 2009.12.16

所 属 福井県立大学看護福祉学部社会福祉学科

に縛られないで、常に自らの思考を新しく切り開いていく姿勢・態度を身に付けたソーシャルワーカーの養成に関心を持ち続けてきた。それは、急速に社会が変化する21世紀の今日において、そこで求められる専門職には、既定の知をただ厳密に応用するのではなく、絶えず変化する現実の泥沼の中で、その時その場の実践に役立つ知識を自ら創りだすような学びの姿勢が必要と考えるからである。そしてその姿勢・態度は、上記に述べたクリティカル・シンキングに近いと考える。

他方ソーシャルワークの分野で、特にカナダやオーストラリアを中心にクリティカル・ソーシャルワークの研究が進んでいる (Ife 1997, 2008; Leonard 1997; Pease and Fook 1999; Healy 2000, 2005; Fook 2002; Allan, et al. 2003; Hick, et al. 2005)¹⁾。またイギリスでも Adams 他 (2002) により「ソーシャルワークにおけるクリティカルな実践」が論じられている。しかしそこで用いられるクリティカルという言葉は何を意味しているのであろうか。先述のクリティカル・シンキングのクリティカルとどのように異なるのであろうか。ソーシャルワーク教育にクリティカル・シンキングの必要性を感じている筆者としては、そこで用いられるクリティカルの言葉に拘らざるを得ない。

わが国にクリティカル・ソーシャルワークを紹介した北川他 (2007) は、その実践上のポイントを9点に整理してわかりやすく説明している。しかしクリティカルという言葉・概念自体に関する論究はされていない。ただ北川他も先述の Adams 他も、クリティカルという言葉や概念が、マルクス主義の影響を受けるクリティカル理論に依拠することを述べている (北川他 2007: 34, Adams, et al. 2002: 8)。

そこで本稿では、以下に述べるようなクリティカル・ソーシャルワーク研究者によるクリティカル理論の解釈・説明を考察することを中心に、クリティカル・ソーシャルワークにおけるクリティカルの概念を整理することを試みる。そして今後それをてがかりとして、ソーシャルワーク教育に必要と考えるクリティカル・シンキングの内容や方法について、より具体的な研究を進めたいと考えている。

以下、まずクリティカル・ソーシャルワークの発展の経緯の説明から論をおこし、次にクリティカル・ソーシャルワーク研究者の中から、クリティカル理論に関する一定の整理をしているオーストラリアの Ife (1997, 1999) と Fook (2002), そしてイギリスの Adams 他 (2002) によるクリティカル理論の説明をまとめる²⁾。そして最後にそれらをもとに、クリティカル・ソーシャルワークにおけるクリティカルの概念について、5点に整理して論じる。

I クリティカル・ソーシャルワークの発展の経緯

クリティカル・ソーシャルワークの源流は、19世紀末のソーシャルワーク成立期にすでに見出されると言われる。即ち、貧困の原因を資本主義の不平等な社会構造に見出し、その変革

に努めたセツルメント活動がそれである。しかしその後ソーシャルワークは、特に1920-30年代を中心として、フロイトの精神分析学の強い影響を受け、謂わば心理主義的ソーシャルワークを主流として発展した。

それに対して再び個人の問題の原因を資本主義社会の構造的欠陥に求め、その変革を目指す実践が台頭したのは1960-1970年代以後のことである。所謂マルクス主義に依拠するラディカル・ソーシャルワークの台頭である。それは、カナダでは構造主義アプローチ、オーストラリアでは開発的アプローチ、イギリスではフェミニスト・アプローチや反差別アプローチとして発展していった。いずれも個人の問題を、階級・人種・性・障害・年齢等の社会・経済・政治的構造が生み出す不平等として捉え、その変革を目標とするものである。いずれも社会正義の実現を主要なテーマとした。それらが、今日のクリティカル・ソーシャルワークの前身と位置づけられている。

しかしやがて時代は保守主義へと変化する。それに伴い上記のような謂わば構造的な分析視座をもつラディカルなソーシャルワーク理論は、うまく機能することができなくなった。それに対する疑問と批判の声が上がってきたのである。即ち、ラディカル・ソーシャルワークがもつ構造的な分析視座は余りにも抽象的で一般的であること、そのため異なる文化や異なる集団が経験する多種多様な差異が考慮されないことに対して、疑問と批判が出されるようになったのである。そこでそれに代わって、そのような構造的或いはマルクス主義的視座だけでなく、多種多様な差異を重視するポストモダンな視座、特にフーコーの理論を取り込む試みが出てきた。例えば Ife 1997, Leonard 1997, Pease and Fook 1999, Healy 2000, Fook 2002 等である。それらが、今日へと展開するクリティカル・ソーシャルワークである。即ちそれは、多様な個人の生活や経験がもつ差異性を重視しながらも、同時にその個人の生活や経験を、それぞれの社会の構造や制度等と結び付けて、その生活上の困難やその解決方法を探ることを志向するものである。多様な抑圧された人たちの個別の声を尊重すると同時に、社会の変革、或いは社会正義のような普遍的な価値をも重視するという、相反する視座を両立するものとして発展している (Allan, et al. 2003 : 17-51, Hick, et al. 2005 : 219-229)。

II クリティカル・ソーシャルワークとクリティカル理論

上記のように、今日のクリティカル・ソーシャルワークは、マルクス主義的・構造主義的な謂わば近代的分析視座と、差異と多様性を重視するポスト近代的分析視座を併せ持つものである。モダンな視座とそれを否定するポストモダンな視座を一つの理論として両立させることは当然困難となろう。しかしそれを可能にさせるのがクリティカル理論であると Ife は述べる (Ife 1999 : 211-213)。

クリティカルという言葉は、Hick によると、マルクス主義の伝統をもつフランクフルト学

派のクリティカル理論の影響を受けて、ソーシャルワークを含め様々な学問分野で好んで用いられるようになった。特に Marcuse による” One Dimensional Man”(1964) や、Horkheimer による “Critical Theory”(1972) が英語圏に与えた影響は大きかった (Hick et al. 2005 : x—xi).

クリティカル理論とは、人間をあらゆる形の抑圧から解放し、自由で民主的な社会実現のために社会の変革、とりわけその初期の理論では資本主義の変革を目的とした理論である。またその社会変革のために人間が果たす役割と力を強調し、また従来の実証主義を否定することを特徴とする (Craig ed. 1998 : 722–728, Stanford Encyclopedia of Philosophy 2009 : 1–2). 但し、それは多様な理論的立場を含む難解な理論であり、そこで Ife (1997, 1999) は、クリティカル理論の中でも特に、被抑圧者への解放的教育を実践したパウロ・フレイレの理論的立場を取り入れることの意義を強調する。それに対して Fook (2002) は、ポストモダンな視座をより強調した立場からクリティカル理論を整理し、言説の脱構築分析、或いは内省 (critical reflection) を強調するクリティカル・ソーシャルワーク論を論じている。いずれもオーストラリアのクリティカル・ソーシャルワーク研究者によるクリティカル理論の説明であるが、以下では、それに加えてイギリスの Adams 他 (2002) によるクリティカル理論の説明も紹介し、クリティカル・ソーシャルワークにおいてクリティカル理論がどのように解釈・整理されたかについて概観する。

1. Ife によるクリティカル理論の整理

Ife (1999 : 211–223) (1997 : 127–151) は、現代のように不確実で不安定な社会において、社会の不正・不平等・差別等との闘いを使命とするソーシャルワーカーは、従来の合理性・客観性・普遍性を価値基盤とするだけでなく、状況の多面性・可変性を尊重し、差異と多様性を強調するポストモダンな価値も重視することが必要であると述べる。そしてそのような謂わば二項対立を止揚・統合する立場を提供するのがクリティカル理論であるとして、それを以下のように3点に整理して説明している。

① 理論と実践の統合

クリティカル理論は、抑圧からの解放、自由で公正な社会の実現、或いは社会正義等の実現を目的とする理論であるが、その理論は、従来の実証主義の理論のように、単に分析や将来予測に役立つものではなく、実際の目的の実現に役立つものでなければならない。従って理論と実践の分離はありえない。つまり理論は実践により発展するのであり、実践も理論により発展する。その意味で理論は実践であり、実践も理論である。両者は謂わばコインの両面なのである。そしてその理論とは、その実践の場で、そこに関わる者、例えばワーカーや利用者等が、共に内省を繰り返しつつ学ぶ過程 (reflexive process) の中で創造されるものである。

② 個人と政治の連結

クリティカル理論では、個人と政治も不可分なものとして捉えられる。即ち個人の問題は、同時に政治の問題であると考えられる。従って、実践も個人だけを対象とすることはありえない。逆に社会だけを対象とすることもありえない。つまり実践は、個人と政治の両面に対して、或いは両面上で行われると考える。そしてそのような両面的実践を可能にするのが、対話である。クリティカル理論は対話による実践を重視する。つまり例えばソーシャルワークにおいて、利用者はワーカーとの対話を通して、自分の個人的問題が実は自分だけの問題ではなく、地域や社会全体の問題であるとの認識を得られる。そしてそれはその解決にむけた行動へと発展する。

③ 専門家と非専門家の共同性

そのように対話を重視する実践からは、必然的に専門家とそうでない者がもつ知・知識を対等に尊重する視点が生まれてくる。即ち従来のように、例えばソーシャルワーカーがもつ知識をその専門性のゆえに優れたものとみなさない。つまり、ワーカーの専門家としての知識も、利用者の生活者としての知識も、同等の価値があると考えるのである。そしてそのような共に価値ある知識をもつ者として、両者は共に学び共に成長する謂わば同志であり、共同学習者なのである。

以上のように Ife は、クリティカル理論を謂わば二項対立的視座を止揚・統合する理論として捉え、それを、理論と実践の統合、個人と政治の連結、そして専門家と非専門家の共同性という3点に整理して説明している。そしてそのいずれにおいても、その要として言葉、或いは対話が重要な位置を与えられている。対話が、謂わば二項対立を止揚し、新しい可能性を開くものとして位置づけられている。但し、Ife は、上記のようなクリティカル理論の解釈と説明を、同理論がもつ多様な理論的立場の一つに過ぎないことを繰り返し指摘していることを補足しておく。

2. Fook によるクリティカル理論の整理

Fook (2002:17) は、クリティカル理論を、社会学者 Agger の研究を参考にして、以下のように説明している。

- ① 支配は構造的であるが、しかし、個人的に経験されるものでもある。搾取は外的に行われるだけでなく、内的な自己支配・自己欺瞞によっても達成される。つまり人は、自身の搾取・抑圧にも加担するということである。フェミニストが主張するように、人は、自己欺瞞的な信条・習慣を固持するのである。
- ② 人はこの「間違った意識」により、資本主義社会における今の社会的諸関係は歴史的に作られたものであり、従って変えることができるという認識をもちにくくなっている。

- ③ クリティカル理論は実証主義を批判する。なぜなら実証主義は、人々に、各自が置かれた状況に対して行動する力を失わせ、受動的・運命論的にさせるからである。事実は歴史の産物であり変えることができる、という意識を成長させなければならない。個人であれ集団であれ、社会を変革できる力があることを強調するべきである。
- ④ クリティカル理論は発展の可能性を中核にもつ。クリティカル理論は人々に、支配について意識化させ、社会の変革が可能であるとの認識をもたせることができる。構造的な支配に気づかせ、それを日常生活に結び付けることにより、クリティカル理論は人を運命論的ではなく、自発的にさせる理論となる。
- ⑤ また知識とは、単なる実証された事実だけでなく、それを研究するものにより創られるものでもある。従って、因果関係の分析により生み出される知識と、内省や相互交流により生まれる知識を区別する必要がある。変革を生み出すプロセスとしてのコミュニケーションを重視する必要がある。

以上の説明から、Fookはクリティカル理論を、まず人間の主観を重視する理論として捉えていることがわかる。即ち人は、社会・経済・政治的な謂わば客観的な抑圧構造により支配されるだけでなく、自身もその抑圧的な価値観を身につけることによりその抑圧的社会構造を維持することを先ず指摘している。しかし続けて、人はその自己欺瞞的認識に気付くことにより、逆にそれを変革する主体にもなれるのであり、それを可能にするのがクリティカル理論であると述べる。そこにFookはクリティカル理論の意義を見ていると思える。また知識についても、既の実証された客観的な知識だけでなく、変革に関する者同志のコミュニケーションと内省により創造される知識を強調する。それは先述のIfeと共通する点であろう。

3. Adams 他によるクリティカル理論の整理

Adams 他(2002: xx-12)は、ソーシャルワークの発展には、クリティカルな実践が不可欠であると述べる。そしてクリティカルであるとは、我々の日常を、より広いコンテキストの中に置き構造的に捉えることであり、クリティカルなソーシャルワークは、そのような思考と行動を内省しつつ(reflexive)循環させる実践であると述べる。従ってそれは、謂わば完成することのない発展のプロセスである、と言う。以下に、その中で説明されているクリティカル理論について4点にまとめる。

① 社会変革と集団による行動の重視

クリティカル理論は、社会の変革と、そのために必要な集団による行動の形成を重視する。つまり社会は常に変化しているが、その社会を変革するのは人間の行動であり、人間にはその力があると述べる。またソーシャルワーカーが個人へ介入し働きかけることは、常に、より大きな社会への働きかけとなる。その意味でソーシャルワーカーの行動は常に政治的

である。

② 社会変革を目指す意図の重視

人間の力により社会変革が実現するかどうかは、人間がもつ意図に大きく左右される。そこでクリティカル理論は、我々に自分自身の意図や自分自身の社会に関する価値観について注意深く吟味することを要求する。我々の毎日の行動が社会の変革に繋がるのか、或いは現状維持に繋がるのか。即ち、我々の意図や行動が変革的で解放的であるか否かが重要なのである。我々の意図が、我々を経済的・文化的・イデオロギー的束縛から解放するような社会運動に繋がっていることが重要であると述べる。

③ 社会変革を志向する社会運動を通して得られるクリティカルな思考と行動

そこで、どのようにすればより自由な社会にむけ変革できるかについて我々は検討しなければならない。階級・ジェンダー等の社会的構造や、障害・人種・性等に関する我々の社会的価値観を分析する必要がある。なぜならそれを通して、それらが決して当たり前の考え方ではなく、変えることができるというクリティカルな思考と行動を得ることができるからである。

④ 言葉の重視

社会やそこでの諸関係をどう理解するかは、我々がそこで用いる言葉に表現される。我々は毎日の行動、或いはお互いの関わりを通して、世界の現状の安定に寄与している。そこでそこから脱出するための唯一の方法は、言葉が表現する社会的な意味を分析し、別の新しい意味を発見することである。それにより我々はより自由になれるのである。

このような Adams 他の説明には、Ife や Fook には見られない特徴が見られる。即ち言葉に明確に注目している点である。勿論それは Ife や Fook が対話やコミュニケーション、或いは言説を重視することで指摘していることであるが、Adam 他は上記の説明④で、謂わば言語が社会や世界を構成するという社会構成主義の言語観・世界観を述べることで、より言語に注目することの重要性を指摘している。

また Adams 他は、まさに本稿が追究するクリティカルという言葉の概念についても多くの示唆を与えている。例えばクリティカルな思考とは、クリティカルな行動と不可分であり、それらは社会的構造や社会的価値観を分析することにより得ることができるものであること、またクリティカルな実践とは、そのような思考と行動を内省的に (reflexive) 繰り返し、常に発展し続けるプロセスであるとの指摘である (Adams, et al. 2002: 3)。

以上、Ife, Fook, Adams 他によるクリティカル理論の説明を概括した。改めてそこから見えてくるのは、いずれもクリティカル理論から、社会変革的な構造的分析の視座と、その変革をもたらす人間の行動力、そしてそれを左右するものとして言葉・言語を重視する視点を得ていることである。またその変革に関わる人間自身により創造される知・理論を重視する視点も押

さえておかなければならない。

Ⅲ クリティカル・ソーシャルワークにおけるクリティカルの概念

さて、上記のように説明されるクリティカル理論に依拠して理論化されたクリティカル・ソーシャルワークとは、すでに述べたように、社会正義や人権等の、謂わば近代が生み出した普遍的で本質的な人間観・世界観・価値観と、人間や社会の個別性・差異性・多様性を重視する、謂わばポストモダンな価値観の両立を志向するものである。それらは厳密には両立しえないが、それを可能にする理論的説明をクリティカル理論の中に見出し、それに依拠することにより、ソーシャルワークの新たな可能性を見出すことを意図しているといえる。

ところが実は、そのような両立の試みについては、かならずしも意見の一致をみていない。むしろそれについては、「我々は、両方の視座を統合した一つの理論的枠組みをつくることを企てない」(Allan, et al. 2003: 9) とも主張している。つまり彼らはそのような矛盾を敢えてそのまま抱えることを志向することで、新たなソーシャルワークの発展の可能性を探ろうとしていると言える。それは、まさに「現在の帳をあげて、新しいソーシャルワークの可能性を見出すこと」(Allan, et al. 2003: 51) を求める姿勢なのである。その意味でクリティカル・ソーシャルワークとは、より公正な社会の実現を求めて、多様な可能性を追求し続ける未完の理論として自らを位置づけるものであるといえる。

以下では、そのように位置づけられるクリティカル・ソーシャルワークにおけるクリティカル概念について、先述したクリティカル理論の解釈・説明をもとにしながら、5点に整理して論じる。

1. 個人の問題を社会の構造・制度に関連させる分析視座をもつ

まず第一に挙げられるのは、個人の問題を社会的・経済的・政治的な構造や制度と関連させて分析する視座をもつことである。これはクリティカル理論の根底にあるものである。Hick他は、正に「クリティカルなソーシャルワーカーになるために」というタイトルの論文 (Hick, et al. 2005: ix-xviii) で、クリティカル・ソーシャルワークの概念を一つに整理することは困難であるが、しかしそこには共通して、クライアントの日常生活の問題を社会的構造や社会的な支配・抑圧関係に関連づけてその原因を探り、その変革・除去を志向する特徴があると端的に述べている。Healyはそれを具体的に、階級・人種・障害・性等の社会的な構造や諸関係が、福祉サービスを必要とする人たちにとって社会的抑圧をうむ原因であるとの認識をもつことであると述べている (Hick, et al. 2005: 219)。このように、個人の問題をより広く社会的・経済的・政治的な問題として捉えなおす視座は、クリティカル・ソーシャルワークにおけるクリティカル概念の第一とみなすことができる。

この点については、わが国にクリティカル・ソーシャルワークを紹介する北川他も、「利用者が語る『生活課題』とは何か、そして、その『生活課題』を生み出す『社会制度や構造』とは何かを考え、その『社会制度や構造』と向き合うための『方略』と『将来的な影響』を利用者と建設的に話し合いながら検討する．．．．このような過程を重視しながら．．．『実践』する『過程』を、本書では、『クリティカル・ソーシャルワーク』と呼んでおきたい。」(2007: 27) と述べている。まさに同じである。

2. 理論と実践を内省しつつ循環的に発展させる

クリティカルであるとは、第二に、社会の変革を目指して理論と実践を内省しつつ循環的に発展させることである。

これについては、Ife が先述のクリティカル理論の説明の中で第一の特徴として指摘した点でもある。即ち、理論と実践はそこに関わる者が内省を繰り返しつつ相互に発展させていくものであり、理論と実践は謂わば同じコインの表裏である。実践なしに理論はないし、実践も理論なしにありえない。クリティカルであるとは、このように思考と行動、理論と実践を内省しつつ発展させるプロセスの連続を意味している。

ところでこの内省 (reflexive) という言葉についてであるが、これは後述するように、実はクリティカルの概念を構成する重要な要素の一つである。そこでここではとりあえずそれを、「自らの価値観を問い続けること」と定義しておき、「理論と実践を内省しつつ循環的に発展させる」とは、自らの価値観を常に問い続けながら、理論と実践を向上・発展させること、としておく。

従来理論とは、実践と距離を保つ形で、客観的・科学的に研究・調査することによりつくられると考えられたため、実践とは分離しがちであった。しかし理論と実践の分離を否定するクリティカル理論では、それは上記のように、まさに実践の場で実践に関わる者が、相互の内省とコミュニケーションを通して創造し、そして絶えず変化・発展させるものと考えられている。

3. 利用者との共同関係を尊重する

先述のクリティカル理論の説明の中で、ワーカー・利用者間の共同性を明確に指摘したのはIfeである。しかしFookもAdams他も、コミュニケーションや内省を通して創造する知の重要性を指摘することでそれを表現していると考ええる。

ところでHick他(2005: xii-xviii)は、クリティカル・ソーシャルワークで最も議論される点は、ワーカー・利用者間の関係についてであると述べている。つまり、ワーカーと利用者の間には不均衡な力関係がある。そこで、ワーカー・利用者間にある力の不均衡を構成し直し、利用者の日常生活上の問題について、その原因を、より大きな社会的構造や関係のあり方に見

出し、その解決・改善を一緒に求めていく過程が重要であると述べている。

しかしここで注意しなければならないのは、クリティカル・ソーシャルワークでは、ワーカー・利用者間に支配・抑圧関係が無くなるべきである、という前提をもたないことである。そうではなく、クリティカル・ソーシャルワークは、フーコーの権力論に依拠して、権力・力関係は「日常生活のいわばいたるところで、常にその力関係を変化させつつ存在している」(Allan, et al. 2003:6) という前提にたつのである。従ってワーカーがもつ権力を脅威として捉えるのではなく、それを、変化を生み出すために積極的に利用すべきと考えるのである。例えばクリティカル・ソーシャルワークでは、ワーカー・利用者間の対話を重視するが、実はそこで生まれる多様な意見や主張にはワーカーの専門性に対抗するものもありえる。とするとそこでは、権力・力関係は逆転するのである。そこで重要なのは、これらの力の差の存在を常に認識しながら、それを問題の改善にむけてうまく用いることなのである (Allan, et al. 2003:61)。

これについて Healy (2000:127-8) は、クリティカル・ソーシャルワークとは、権力はどのような関係にも存在することを認識した上で、公正で人間的な実践を促進することであると述べている。対等な関係・対等なラポートがあるふりをするのではなく、相互に尊敬し、相互に情報を交換し、相互にオープンで明確なコミュニケーションをすることが重要なのであると述べている。

4. 言葉を重視する

先述のクリティカル理論の説明の中で、言葉の重視を明確に指摘したのは Adams 他であった。しかしそれは、対話の重要性を指摘する Ife や Fook にも共通している点である。

Allan は、この点について次のように述べている。即ち、利用者はワーカーと日常生活上の困難とその解決方法について一緒に話し合うことを通して、自分の個人的な問題が、実は地域の問題であり、従ってその解決には地域全体で取り組む必要があることを認識するようになるかもしれない。また個人的な問題として表現した言葉を、地域の問題として表現する言葉に置き換える可能性があるかもしれないと述べる。但しそれは可能性であって、それをワーカーは利用者に押し付けることはしない。ポストモダンの視座では、ワーカーはどこまでも利用者との対話から生まれる多様な意味を聴き取ることを重視するからである。そこで重要なのは、それを尊重しながら、利用者の問題の解決に向けて、相互の対話を続けることなのである。(Allan, et al. 2003:65)。

私たちは、言葉を通してはじめて現実を認識できること。より端的に言えば、言葉により私たちの社会的現実が構成されること。これは、ポストモダニズムを知的・文化的背景とする社会構成主義の言語観・世界観であるが、ポストモダンな視座をもつクリティカル・ソーシャルワークでも同じ言語観にたつ。従ってクリティカル・ソーシャルワークでは、言葉に注目し、

言説分析を重視する (Allan, et al : 2003 : 59). 即ち, 利用者はワーカーとの対話を通して, 自分を支配し苦しめている言説に代わる別の新しい言説を発見することにより, 抑圧から解放されて, 謂わば自分らしい生活の再建に向かうことができると考えるのである.

5. 内省 (reflexivity) を重視する

最後に, クリティカル・ソーシャルワークにおけるクリティカルの概念として忘れてならないものに内省 (reflexivity) がある. これは Fook が **critical reflection** と表現しているものである. 先述の Ife, Fook, Adams 他によるクリティカル理論の説明の中では, 特に理論と実践の統合の説明の際に重視されたことである.

これは実は, 単なる振り返り (reflection) とは異なる. reflection や reflective とは, ある出来事について, 例えばその全体のプロセスを思い出し振り返ることを表すが, それに対して reflexivity や reflexive とは, その出来事に関して, 出来る限り多様な視点から見直し検討することである (Payne 2005 : 32). もともとは質的研究の分野で提起された概念であり, それは研究者が保つべき自己認識であると説明されている. 即ち, 自分自身が研究結果にどのような影響を与えたかについて認識することである (Adams, et al. 2002 : 86). ということは, 自分自身の考え方や価値観がその場にどのような影響を与えているか, そもそも自分の存在自体がその場にどのような影響を与えているかをも検討することである. その意味で reflexivity とは, 各自の立ち位置を鋭く問いなおすことでもある. クリティカル・ソーシャルワークにおけるクリティカル概念とは, 実践と理論において, ワーカーに自らの立ち位置を常に見直すことを迫るものであるといえる. それを Hick 他は「ソーシャルワーカーにならない新しい革新的な方法を探究すること」(2005 : xii) と述べている.

おわりに

以上, クリティカル・ソーシャルワークに関する論文や著書, 特に Ife, Fook, Adams 他によるクリティカル理論の説明を中心に検討することにより, クリティカル・ソーシャルワークにおけるクリティカルの概念を考察し, 上記のような5点に整理することができた. 既に述べたように Adams 他は, ソーシャルワークの発展にはクリティカルな実践が不可欠であると述べている. そしてクリティカルな実践とは, 繰り返すまでもなくクリティカルな思考と行動から成る. 改めて, ソーシャルワーカーの養成教育において, クリティカル・シンキングを重視する必要がある, そのための教育の内容・方法に関する研究の必要性を確認する.

ところで, はじめに述べたように, クリティカル・シンキングを重視する教育は, 教育学, 哲学, 心理学は勿論のこと, 最近ではコミュニケーション学や, また経済や看護等の実践分野においても重視され研究が進められている. 従ってそれは多様なアプローチとして発展してい

るが、Payne はそれらを、「所謂思考の論理性を重視する立場と、クリティカル理論を重視する立場に分けられる」(Payne 2005: 37) と述べている。ソーシャルワークにおけるクリティカル・シンキングとは、勿論後者の立ち場・アプローチを重視することであろう。それが本研究を通してより明確になった。今後は本研究の結果をふまえて、ソーシャルワーク教育におけるクリティカル・シンキングの概念とその教育方法の確立にむけて研究を重ねたい。

実はそれに関連して、成人教育学の分野でクリティカル・シンキングについて研究を進める Brookfield の次のような指摘がある。即ち、そもそも私たちの考え方や行動は、置かれた文化・時代・状況を反映しているため、私たちは、各自の考え方や行動を広く社会や政治に関連づけて認識することが必要である。即ちクリティカル・シンキングの核心は、謂わば個人の問題を広く社会的な力・権力等と関連づけて考えることにあり、と (Brookfield 1987: 3-68)。そして実際の教育の場で、各自の価値観、或いは当たり前と考えていることを、別のコンテキストから捉えなおす、謂わば脱構築の作業を実践している。

筆者としては今後、その方法論等も参考にしながら、ソーシャルワーカー養成におけるクリティカル・シンキングの概念や教育方法について、理論化と実践の両作業を重ねていきたい。

注

- 1) クリティカル・ソーシャルワークに関する著書・論文は他にも多数ある。ここでは筆者が入手したもののみあげた。
- 2) Pease, B. は、オーストラリアのクリティカル・ソーシャルワーク研究者間で、その理論的枠組みにおけるクリティカル理論の評価・位置づけに差があることを指摘している。例えば Ife と Fook には少なからず差があると述べている (横田2007: 103-138)。その意味でもこの両名によるクリティカル理論の説明を検討することは必要であろう。

参考・引用文献

- Adams, R., Dominelli, L. and Payne, M. eds. (2002) *Critical Practice in Social Work*, Palgrave.
- Allan, J., Pease, B. and Briskman, L. eds. (2003) *Critical Social Work: An Introduction to Theories and Practices*. Allen & Unwin.
- Brookfield, S. D. (1987) *Developing Critical Thinkers: Challenging Adults to Explore Alternative Ways of Thinking and Acting*, Open University Press.
- Craig, E. ed. (1998) *Routledge Encyclopedia of Philosophy*, Routledge.
- Fisher, A. (2001) *Critical Thinking: An Introduction* (=2005, 岩崎豪人・品川哲彦・浜岡剛他訳『クリティカル・シンキング入門』ナカニシヤ出版.)
- Fook, J. (2002) *Social Work: Critical Theory and Practice*, Sage Publications.
- 舟木紳介(2007)「オーストラリアのクリティカル・ソーシャルワーク理論における社会正義概念とポストモダニズムの影響」『社会福祉学』Vol. 48-3, 55-65.
- グロービス・マネジメント・インスティテュート (2005) 『MBA クリティカル・シンキング: MBA 思考力

ゼミナール：新版』ダイヤモンド社.

Healy, K. (2000) *Social Work Practices : Contemporary Perspectives on Change*, Sage Publications.

Healy, K. (2005) *Social Work Theories in Context : Creating Frameworks for Practice*, Palgrave Macmillan.

Hick, S., Fook, J. and Pozzuto, R. eds. (2005) *Social Work : A Critical Turn*, Thompson Educational Publishing, Inc. Toronto.

Ife, J. (1997) *Rethinking Social Work : Towards Critical Practice*, Longman, Melbourne.

Ife, J. (1999) Postmodernism, critical theory and social work, Pease, B. and Fook, J. eds., *Transforming Social Work Practice*, Routledge.

Ife, J. (2008) *Human Rights and Social Work : Towards Rights-Based Practice*, revised edition, Cambridge University Press.

岩崎豪人 (2002) 「クリティカル・シンキングのめざすもの」『京都大学文学部哲学研究室紀要 PROSPECTUS』 No. 5, 12-27.

北川清一・松岡敦子・村田典子 (2007) 『演習形式によるクリティカル・ソーシャルワークの学び』中央法規.

Leonard, P. (1997) *Postmodern Welfare : Reconstructing an Emancipatory Project*, Sage Publications.

松岡敦子 (2003) 「クリティカル・ソーシャルワークと家族への支援」『社会福祉研究』 No. 88, 鉄道弘済会, 41-47.

Paul, R. and Elder, L. (2001) *Critical thinking* (=2003, 村田美子・巽由佳子訳『クリティカル・シンキング—「思考」と「行動」を高める基礎講座』東洋経済.)

Payne, M. (2005) *Modern Social Work Theory, 3rd edn.*, Palgrave Macmillan.

Pease, B. and Fook, J. eds. (1999) *Transforming Social Work Practice*, Routledge.

鈴木建, 大井恭子, 竹前文夫編 (2008) 『クリティカル・シンキングと教育』世界思想社.

寺田欣司 (2001) 『クリティカルシンキングの技術—21世紀のビジネスパーソンに求められる正しい認識と意思決定の思考術』オーエス出版.

横田恵子編 (2007) 『解放のソーシャルワーク』世界思想社.

Standford Encyclopedia of Philosophy 2009, *Critical Theory*

<http://plato.stanford.edu/entries/critical-theory/> April 10, 2009.